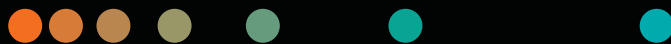


Siemens Healthineers イベントのご案内

第5回 イムノケミストリー オンラインセミナー



www.siemens-healthineers.com/jp



時下、先生方におかれましては益々ご清祥のことと謹んでお慶び申し上げます。

2022年10月7日に開催されました、日本医療検査科学会第54回大会ランチョンセミナー「新型コロナウイルスにおける各種測定法の位置付け」は大変好評の中、終えることができました。

ご参加いただいた多くの先生方より再度聴講のご要望をいただき、この度、「第5回 イムノケミストリー オンラインセミナー」を開催させていただきます。

現在もなお、新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）の変異株「オミクロン株」による感染が拡大し、収束の見込みが立っていません。日本ではオミクロン株の1つである「BA.2」から「BA.4」「BA.5」系統に置き換わり、感染再拡大の一因にもなっています。国内においてはSARS-CoV-2検出検査として、ウイルスの検出感度が高いPCR検査、次に抗原定量検査、抗原定性検査があります。多くのご施設では、PCR検査と抗原検査（定性、定量）を採用されている中、各種検査法の使い分け方について多くの疑問や不安などを抱えられているのではないのでしょうか。また、SARS-CoV-2抗体検査は保険収載されていませんが、抗体検査のポジショニングや実施の必要性などについても悩まれているかと考えます。

今回は、「続 新型コロナウイルスにおける各種測定法の位置付け」をテーマにご講演いただきます。ご多用中の折とは存じますが、何卒ご出席を賜りますようお願い申し上げます。

日時：2022年 **12月2日**（金）18:00～19:00 ライブ配信（開場17:45）

参加方法：専用申込フォームからお申込みください。

<https://www.siemens-healthineers.com/jp/laboratory-diagnostics/immuno-chemistry-seminar-register>

申込期限：11月25日（金） 23:59まで

視聴方法：申込完了後、11月30日（水）に

ご登録のメールアドレスへ視聴用URLをお送りします。



講 演：**続 新型コロナウイルスにおける各種測定法の位置付け**

演 者 I：梅橋 功征 先生

独立行政法人 国立病院機構 鹿児島医療センター 臨床検査科 副臨床検査技師長

演 者 II：藤野 達也 先生

独立行政法人 国立病院機構 指宿医療センター 研究検査科 臨床検査技師長

主催：シーメンスヘルスケア・ダイアグノスティクス株式会社

SIEMENS
Healthineers

「続 新型コロナウイルスにおける 各種測定法の位置付け」

国立病院機構 指宿医療センター 研究検査科 藤野 達也
国立病院機構 鹿児島医療センター 臨床検査科 梅橋 功征

世界中で新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）の変異株「オミクロン株」による感染が拡大し、未だ収束の見込みが立っていない。現在、日本ではオミクロン株の1つである「BA.2」が感染の主流だが、「BA.4」、「BA.5」系統に置き換わりつつある中で、感染者数が再び増加しており、変異株の出現が感染再拡大の一因となっていると考えられる。その中で、適切な検査を選択し、感染者をより早く、そして正確に拾い上げることは感染拡大を食い止めるために大変重要である。また、新型コロナワクチン接種も感染拡大を防ぐために重要であるとは言うまでもない。ワクチン接種のオミクロン株に対する効果は、それ以前の株に比べると弱いとされているものの、重症化や死亡のリスクを下げると報告されており、3回目、4回目接種が進められている。

現在、COVID-19を対象とした検査には、SARS-CoV-2そのものを検出する核酸検査、抗原検査と、ウイルスに対する免疫反応を検出する抗体検査がある。核酸検査と抗原検査は、現時点での感染を確定する診断法である。一方、抗体検査は感染の既往を証明するものであり、疫学調査などに用いられている。ウイルスを検出する検査の検出感度は高い順にPCR検査、抗原定量検査、抗原定性検査であり、ウイルス量が少ない感染初期（潜伏期）には、最も感度の高いPCR検査を行い、確実に感染初期の患者を拾い上げる必要がある。しかし、Mina MJ (*N Engl J Med* 2020) らは、高感度のPCR検査を7日ごとに実施するよりも、感度が低い抗原検査を3日ごとに行ったほうが推定感染者数を抑えられると報告しており、検査時間が短く、専用の設備を必要としない抗原検査も感染抑制に十分貢献できるといえる。日本では、最初に感染が確認された2020年1月からわずか2年あまりで数多くの検査法（体外診断用医薬品）が承認され、使用可能な状況にある。それぞれの感度や特徴をよく理解し、多くある検査法や試薬をいかに現場で選定し、使用するかが非常に重要である。

2022年6月時点で国民の6割が3回目のワクチン接種を終えたが、そこで獲得された免疫も徐々に減衰していくことが考えられ、今後さらに感染者数が増加するのではないかと懸念されている。4回目のワクチン接種は「60歳以上の人」や「18歳以上の基礎疾患のある人」に限定されているが、3回目の接種で得られた抗体価の推移によりワクチン効果がどの程度持続するのかを確認していくことは、今後定期的にワクチン接種が必要か、という見極めに大変重要である。我々もワクチン接種後の抗体価の推移について検討しており、3回目の効果に注目しているところである。

本セミナーでは、各種検査法の使い分け方について、実際の症例も提示して述べる。また、ワクチン接種後の抗体の動態やワクチンの効果についての情報も提示する。